



臨床医がすすめる図書館資料 —わが国の医療を考えるこの1冊—

山片 重房

「Breast Disease for Gynecologists」

William H. Hindle

Appleton & Lange

1990

私がなぜ病院図書室に必備だとも思われないこの1冊を取り上げたのか、理由を述べたいと思います。

15年前、私は日本産科婦人科学会学術担当幹事として、毎月開催される常務理事会に陪席していました。ある時、学会長が少々困った顔つきで「FIGO（国際産婦人科連合）より、乳癌委員会へ代表委員を推薦すると言われているのですが…？」と述べられました。しかし、ご出席の理事や監事の先生方は互いの顔を見合うばかりで、誰からも委員推薦の声は上がらず、結局、日本は指名を受けているにもかかわらず、委員の推薦を断念せざるを得ませんでした。

ご承知のように、乳癌はアメリカ人女性に発生する癌の中ではダントツの位置を占めます。年間14万人以上の患者が新たに発見されていて、4万3千人以上が乳癌で死亡しており、今やアメリカ人女性の生涯乳癌リスクは1/9にもなっています。この事態を予測した米国産婦人科学会は、1973年に乳癌を将来の重点項目に取り上げ、翌年から乳癌を卒後研修に組み入れました。そして1986年には産婦人科レジデント教育のカリキュラムを改革して、乳房の専門教育、乳癌診療のトレーニングを必須としました。米

国医師法には、産婦人科医は女性の primary health care を担当する医師として、乳房診療に従事し、乳癌を発見する責任があると明記されています。

また、欧州には乳癌手術を専門とする婦人科医もいます。いまや婦人科医が乳癌を取り扱うのは世界の常識となっているのです。

癌検診で最も効率がよいのは、子宮頸癌と乳癌の同時検診であるとされています。共に女性が対象であり、両癌の発症年齢が近似しているからですが、この同時検診を担当できるのは婦人科医しかありません。私は現在の石切生喜病院婦人科に就任したとき、婦人科腫瘍に併せて乳癌診療を標榜し、当院の婦人科医には診断技術と手術の習得を義務づけました。女性特有の癌は婦人科医の手でという信念と、15年前に世界から置いて行かれた悔しさが忘れられなかったからです。当院は、婦人科が乳癌診療を行う日本最初の病院になりましたが、女性が乳房疾患で婦人科を受診するという気安さが地域の中で自然に受け入れられ、いまでは年間2千人以上の受診者が来院されるまでになりました。

日本人に発生する癌の欧米化傾向が進む中、1995年には乳癌が女性の癌新発生数の第1位に躍り出ました。乳癌による死亡が胃癌を抜いて日本人女性の癌死のトップを占める日が近づいています。乳癌検診・治療が外科の一部の先生方（乳癌専門医）だけでは足りなくなることが明白で、厚生労働省も対策に躍りになってい

そんな中、今日もテレビの医療番組で、“え

らい先生” が語っておられます「乳癌検診のために間違って婦人科へ行かないでください。乳癌は外科なのですよ…」。

乳癌診療を教えられない大学産婦人科、乳癌

患者を扱えない病院産婦人科、この世界の常識から大きく遅れをとった日本の現実に早く目を開いてもらいたいと、敢えて取り出した1冊でした。